



上の写真はとある昼休みの編集室の風景です。

「飛翔な日々」は、私たち飛翔編集委員の常日頃思うことを発信するとともに、飛翔をもっと皆様の身近に感じてもらいたいという思いから生まれたコーナーです。

飛翔はこんな感じの人たちによって作られています。

よかったら覗いてみてください。

雨男

平野 俊樹

自分は雨男だと痛感することがある。友達に言うと笑われるけど、真剣にそう思う。高校時代、いろいろなことがあったけど、肝心な日にはかなりの確率で雨が降った。水泳の試合、修学旅行、その他諸々……。そのたびに雨男である自分のせいにされる。でも正直、雨は嫌いじゃない。むしろ、最近雨が少し好きになってきた。肝心な日に雨が降るということは、逆に言えば雨が降った日は大切な日。最近、雨が降るたびにいろんなことを思い出す。幸せなこと、つらかったこと、楽しかったこと、頑張ったこと。いろんな思い出が雨の中に映って、胸の奥に染み込んで忘れかけていたことも、ふと思いだしたりする。時にはぼんやりと。時には鮮明に。ちなみにこれを書いている今日は小雨が降っている。高校の修学旅行もこんな感じ。ふと思いだしたのは、なぜかテンションが上がって傘もささずに友達と走り回ってホテルの前で滑って転んだこと。今思い出しても恥ずかしい。

周りから見ればどうでもいいような思い出だけど、押入れの奥の宝物のように、薄くかぶったほこりをそっと払いながら取り出して、また大切に元の場所に戻して。そんなふうにして些細な思い出をいつでも思い出せる。

自分は雨男だと痛感することがよくある。とりあえず誇りに思うことにする。有名な曲にもあるし、『思い出は、いつの日も雨』って。

八方美人の素顔

中村 洋平

今号では編集長を務めさせていただきました中村です。

最近右足を捻挫しまして、引きずって歩いています。というわけで、左足が孤軍奮闘してくれています。

人間は立っている時、無意識に体重をかける足を入れ替えているのです。知ってはいませんが、実際に体感するとやはり辛いな、と言うのが正直な感想です。椅子を見つけると「どっこらしょ」と座り、それから左足君お疲れ様、と心の中で労っています。編集長としての仕事はあまり動き回るようなものではないのですが、代わりに他のメンバーの皆が頑張ってくれています。

「大人になったら自分の足で歩きなさい」なんて言葉を聞きますが、今の私は何十本もの足に支えられて歩いていきます。なんとも照れくさい言葉ですが、そんなことを思いました。そして、これからはそうやって歩いていくのだと思います。それから、支えてくれた分だけ支えてあげたいと思うのです。

だから、私は好かれる人間でありたいなと思います。

中学校や高校時代の私は（自称）優等生でしたので、宿題をきちんとこなしておりました。すると自然な流れで「宿題見せて」ということがよくありました。当時の私はそれを嫌っておりました。自分で努力しなければ意味がないからです。それは今でも同じです。

しかし裏返せば、それだけ自分に余裕があることだと思うのです。その余裕をいろんなところに活かすことができるなら、そんなに良いことはありません。

今の自分は「忙しい」と口癖のように言っています。そのたびに心を亡くしているなどと言ってしまったわけですね。忙しいからあれができない。忙しいからこれもできない。忙しいからしょうがない。そんな「しょうがない」なんて妥協は私

の中においておきたいのです。

皆に笑っていて欲しいなんて、

ただの偽善者の、

最大限の努力の果てなら、

笑えないから。

大学デイズ

〜アルパ時々、ヨースケ。

中野 陽介

僕は大学に入ってから『アルパ』という

あだ名で呼ばれるようになった。この求人情報誌のような高山動物のようなあだ名は、入学直後に総科の先輩から付けていた。だいたいがたい名前なのだ。

だが、このあだ名にはいくつか難点がある。一つは、初対面の人に名乗ると必ず由来を聞かれるのでその都度説明するのが面倒な点である。次に、由来を説明したところでいつも「へえ〜」程度の返しで終わってしまうので正直しんどい。そして最大の難点は、そんなにインパクトがあるわけでもないのに覚えてもらいにくいという点だ。

読者の方にはどうでもいいだろうが、この際名前の由来を述べておく。そう、何を隠そうこのあだ名の由来はあの有名な『アルパーク』だ。と言っても、アルパークをご存じない方も多いだろうと思うので説明しておく。

アルパークとは、JR西条駅から岩国・下関方面の電車に乗り、広島から三つ隣の新井口という駅で降りると見えてくる大型ショッピングモールだ。駅から動く歩道でつながっているため交通の便はかなり良い。しかも、たくさんお店も入っているため何でも揃う。そこで一日中過す事だって可能だ。広島県に住んでいる人であれば、一度はアルパークに行ってみて欲しい。

ただ、「実家がアルパークの近くです」と口にしてしまったばかりに、大学の僕のあだ名はアルパとなったのだ。しか

も、このアルパークの名前の由来は、小学三年生くらいの時に社会科学見学でアルパークに行った時に担当の方に質問したところ「特にない」と言われた思い出があったような気がする。

ここまで読んでいただくと、僕はこのアルパークという名前に満足してないように思われるだろうが、実は二年半も呼ばれ続けると愛着が湧いてくる。アルパークのCMなんかを見た時には親近感も湧いてくる。呼ばれるたびに地元に戻った気分になる。このあだ名によって僕は自分の地元愛に気づくことができたのかもしれない。

来年アルパークが更にでっかくなつてオープンするらしい。それに合わせて、僕もでっかくなる計画が打ちあがっているのだが、オープンはいつになるのやら……。

総科での日々

五十嵐 太郎

一人で出来ることならいくらでも無茶をやるが、一人で出来ないことには手を出さない、というところがある。

だから、展開研究などは楽しかった。いつ何をどのようにするの程度やるか、あるいはやらないか、全て一人で決められた。決められないのは、実質的には、論文提出とポスター発表の期日だけである。そこで、時間があれば中央図書館の地下書庫に潜

り、論文を読んでいた。自分がこうしようと思うことを、自分の都合に合わせて、やった。

実に気楽だ。何が気楽といつて、うまくいかなくても不利益を被るのは自分一人、これほどやりやすいことはない。要は、翌年再履修すれば良いのである。自分の責任が自分に帰ってくるという、簡単な話だ。逆に、自分の責任が他人に帰っていつてしまふようなことには、なるだけ手を出したくないと、常々思っている。

だから、『飛翔』の編集長などは結構きつかった。それこそ就任当初は、胃が痛くて仕方なかった。自分が判断を誤れば、みんなに無用の負担がかかる、という思いだった。

しかし徐々に、どうやって取り組めば良いのか、自分なりのやり方が見えてきた。決断はわたしがする。しかしその前に、出来る限りみんなと話し合う。みんなでひとつのものを作るとはどういうことか、考えた末に見えてきたやり方だった。

決断はわたしがする。誰にどういった権限を持たせるか、問題が生じた際どう対処するか、締め切りはどうするか。そしてわたしがこうと決めたら、みんなには従ってもらう。それぞれがなんとなくやっていたのでは、まず期日に間に合わない。一致した行動を取るためには、リーダーの決定と指示が必要である。これをしないならば、すなわち責任の放棄である。そしてこれを

する以上、『飛翔』が発行できなければそれはわたしの責任である（なんてことは、引退した今だから言えるんですけどね）。

しかし決断の前に、出来る限りみんなと話し合う。特に一年の時から一緒にやっている五人の同級生には、ことあるごとに意見を求めた。相談の末、わたしの当初の考えと反対の結論が出ることも度々だった。そもそも、わたしに特別なノウハウがあるわけではない。ただ、決断するという役割を引き受けたに過ぎないのだ。

当初胃が痛くなったのは、一人でやることとみんなで行うことの区別がついていなかったためであるように思う。全てを一人でやるわけにはいかない。また、一人でやるべき部分もある。それを見極めるのに、時間を要した。自分と他者との関わりを捉えられていなかった。

考えてみれば、論文を読むという作業だって、他者と関わっている。第一、論文を書いた人がいる。そのバックには、途方もない先行研究の蓄積がある。それに、論文を審査する人、雑誌を編集する人、購入する人や並べる人もいる。それで、やっと読める。

一人でやっているつもりでも、必ず他者との関わりがある。みんなで行うことの中にも、一人でなすべきことがある。展開研究と『飛翔』に取り組む中で、そんなことが見えてきた。この学部に来て良かったと思う。